

運転免許証の返納

首藤静夫

苦勞して取得した割に免許証の返納はあつけなかった。

五月の誕生日を前に所轄署から免許証の更新案内がきた。この誕生日で後期高齢者となる。少し迷ったがエイヤと返納した。免許証代わりの身分証を貰うつもりだったが、有料というので妻に反対されて貰えず。車は三年半前の水害で廃車したので運転していた証は何もなくなった。

免許の取得は遅く、五十歳だった。新潟への地方勤務が機縁となり、仕事の合間を縫って夜間の教習所に週一、二度通った。教習の最初に運転適性を見る心理テストがあり、「優・良・可・不可」のうちの「可」だった。びっくりした。そんなに性格が悪いのか？

新潟の冬場の教習は大変だ。積雪で練習できない時もやったことにして「済み」の判子をもらった。そんなこんなが重なって仮免で落とされ、本免でも落ちた。その時に本免で落ちたのは自分一人。教室にシヨンボリしていると一緒に試験を受けたルーズソックスの女子高生に「大丈夫よ、頑張つて！」と励まされた。普段はルーズソックスの子などと眉をひそめていたが女の子らしい優しさを感じた。

苦勞の甲斐あつて免許証を貰ったのは五ヶ月後の桜の頃だった。小さめの普通車を買って北陸や長野を休みごとにドライブした。しかし、運転はそれほどまくならなかった。何故か横振れが直らず、速度も一定しない。それを自覚して高速道では決して追い抜きをせず、抜かれるに任せた。一度、富山県の「親不知トンネル」で大型トラックに追いかけれられ必死の思いをした。こちらがどこかでマナー違反をして相手の気に障ったのかも。とにかく横ぶれをするので高速道のトンネルが怖い。二車線で隣にトラックなどが並ぶと何故かそちらに吸い寄せられ、かと思うと左の壁に近づきすぎて助手席の妻はひやひやのし通しだったようだ。

やっと取れた免許証を二十数年で返納してちよつと淋しくもあるが、無事故できた安堵とともにドライブの楽しい思い出がよみがえる。